



連載 I
当財団専門委員
私の研究と観光
第1回

旅の本質を探る研究への期待

東京大学・政策研究大学院大学教授

家田 仁

観光研究の諸タイプ

観光の研究というと、筆者のみるところ、いくつかのタイプに大別できるようだ。

まず、第一は種々の統計や調査などをもとにして、観光需要の動向や特性を分析し種々の観光施策の参考にしようというものである。

第二のタイプは観光サービスの供給サイドであるところの観光業・旅行業などの特性分析を主眼とした研究である。

少なからぬ研究者がこうした分析タイプの研究を得意としていて、全体的に見て実務的にそれなりの示唆をもった結果を生み出している。分析の方法論的にも洗練されたものをもって、ところが、そもそも観光そのものが本質的に刹那的で、はやりすたりに大きく左右されるという性質を持つので分析結果はというと、悲しいかなやはり中長期的な意義に限界があるようだ。学問の深みというよさうな面から見ると、「さうだったんだ!!」という具合に知的に驚愕・感心するような成果には、筆者は残念ながらお目

にかかったことがない。

第三のタイプは、観光対象（観光地）のコンテツの充実や空間質の改善などを図ろうとするものである。

まちづくり活動や景観設計などに直接的に関わる分析者というよりは実践者という傾向の強い研究者たちが担ってきた研究活動である。その中では、活動の結果としての充実や改善というよりも、市民も含めて「活動・運動」していることそのものに情熱を注いでいる研究者も少なくない。こうしたタイプの活動は、実際の観光対象の改善に少なからず寄与してきたように思う。ところがこうした活動はどうしても個々の観光対象における個別性の中で実践されるから、知見や経験が体系的・普遍的に蓄積・整理されにくく、どうしても「個々のケース記述」の域を脱しにくいようだ。逆に、あまりに安直に体系化・普遍化されるようでは、観光地の個性的な魅力を創り出すことは難しい。ここにこのタイプの研究のつらさがある。

第四タイプの研究く旅の本質はどこに？

第四のタイプの研究は、人間にとって旅の本質とは何かという問いを追い求めるものだ。

率直に言って雲をつかむような話だし、それが直ちに実務の何に役立つということもないだろうが、言ってみれば、これは「旅」という切り口を通じて人類を理解しようという研究であるから、観光に関する最もダイブなタイプの研究ととらえることができる。

「旅する巨人」と言われた宮本常一先生とか、鈴木忠義先生、渡辺貴介先生らの著作を読むと、このタイプの研究が観光研究の本丸だろうという思いを強くする。このタイプの研究の主たる関心（ミッション）は次の二点に集約されるだろうと思う。

第一の研究的関心は、なぜ人は旅をするのか？ 何が人を旅に駆り立てるのか？ 人は旅に何を求めるのか？ といった謎に迫ることだ。

生理的・生態的に合理的な動因によって「移動」する生物は無数にある。人間の「移動」も、その多くは交易とか行政とか通勤・買物・通院などといった実質的な必要のために生じる「派生的に生じる移動」である。ところが人間に限っては、古来、とても必要不可欠とは思えないような、時に危険と冒険心に満ちた、時に酔狂な「旅」をしてきた。この疑問の解明は、人間理解の一つの重要な糸口であることは間違いない。

もう一つの関心は、右記とは逆に「旅」は人間（旅人）にどんな影響や効果を与えるのか？旅によって人は何を得るのか？旅は人をどう変えるのか？という問題である。

昔から「かわいい子には旅をさせよ」といわれてきたことは誰もが知るところだが、宮本先生が繰り返し述べているとおり、旅というものが人づくりに大きく寄与したことは確かだ。それは人の視野を広げ、自らを相対視することを学ばせ、また人をタフにし、身体的にも精神的にも医学的にもウエルネスの面でも注目すべきものといわれている。「旅」が教育の上で格段の地位を与えられていることを理解するには、修学旅行の存在を挙げるまでもない。

旅の本質とパイオニア・トラベラー

これら二つの側面から眺めると、宮本先生をはじめ多くの著者が述べるとおり、「旅」が人間の本質的な要求に答え、しかも「旅」が人間に本質的な果実をもたらすためには、「旅」が旅人に何がしかの「未知」と「労苦」を与えるものであることが必要条件であるようだ。

逆に、現代の観光では「旅」のもつこうした本質的な要素が次第に希薄になってきているという点は、ダニエル・ブーアステインが『幻影の時代―マスコミが製造する事実』（1964年）で嘆いたところである。

実際、「未知」と「労苦」を伴った「本源的な旅」が、旅というものの源泉的な存在となっていることは、探検であれ、巡礼であれ、修験道であれ、挑戦的取引者であれ、冒険者であれ、放浪者であれ、洋の東西を問わず共通しているようである。観光需要の量的大宗を占めるマス・ツーリストにとつても、あるいは経済的な意味で重要性の高いプレミアム・ツーリストであっても、実はそのモデルとなっているのは、少数ではあるもののこれらのパイオニア・トラベラー＝先駆的旅人たちの「旅」である。

このことは、登山などを例にとつてもすぐわかる。現在、大人気の日本百名山、あるいは大量登山の対象と化したエベレストだが、これらのモデルも先行するパイオニアたちの「未知」と「労苦」を伴った幾多の山行である。

したがって、この第四のタイプの研究のミッションである、旅の本質に迫ろうとするならば、その対象として注目すべきは、マス・ツーリストや統計数値ではなく、こうした少数の「旅」の先駆的旅人たちなのであろう。また、そうした精神医学や脳科学、スマートウエルネス、教育学、そして哲学など、幅広い分野の方々とのコラボレーションも望まれるところだ。

『旅の意味と可能性を探る研究会』

このような視点から「旅の本質」に迫ろうと、

5年ほど前から同好の研究者や実務者が定期的に集まって勉強会を続けてきた。

これは、淑徳大学の廻洋子さんを会長とする『旅の意味と可能性を探る研究会』というグループで、現在21名（半数以上が女性）がメンバーとなっている。これまでいろいろな視点からメンバーによる講演を行ってきたが、その講演録を下記のサイトに掲載している。故、関心のある読者は是非アクセスしていただきたい。また、趣旨にご賛同いただける向きにはご参加もお勧めしたい。

（いえた ひとし）



家田 仁（いえた ひとし）

1955年生まれ。78年東京大学工学部土木工学科卒業、日本国有鉄道入社。84年東京大学助手、86年東京大学助教授を経て、95年東京大学教授（工学系研究科社会基盤学専攻）、2014年より政策研究大学院大学教授を兼任、現在に至る。途中、1988～89年西ドイツ航空宇宙研究所交通研究部客員研究員、1993～94年フィリピン大学交通研究センター客員教授（JICA専門家）、2008年清華大学客員教授に派遣される。専門は、交通学、都市学、国土学。

旅の意味と可能性を探る研究会 Travel Essence Research Board

【会の趣旨】本研究会は、短期的な観光業の振興あるいは狭義の観光立国といった政策などに過度にとらわれず、

- ①人類にとって「旅」がもつ本質的な役割や重要性を実証的に再確認すること
 - ②現代の人間社会がおかれた環境の中で「旅」がもつ可能性とその将来的あり方を希求考察すること
- を目的としています。 <http://www.trip.t.u-tokyo.ac.jp/tabikenkyukai/lectures.html>